

「若手研究者の初論文特集」によせて

「分析化学」編集委員長 酒井 忠雄

国内の若手研究者が分析化学のどのような問題に興味を持ち、問題解決にどのように挑戦したか、また、そのプロセスで得た新たな知見と成果を披露する場として「若手研究者の初論文特集」が「分析化学」第51巻、第9号に企画された。この狙いは「若手研究者を育て研究のまとめ方を習得する場」を提供することであるが、この企画に多くの若い研究者が参画して、多くの論文が投稿されている。審査をパスし、掲載された論文は学術性・実用性において満足できるもので、その評価は高い。今年度は第6回目になるが、論文に目を通して頂くと分かるように、「若い研究者」が新規分野の研究や新しい分析技術の開発などに携わり、夢と希望が膨らむ研究に力強く取り組んでいることが分かる。「若手初論文」の中から「若手初論文賞」が授与されているが、2006年度は岡山大学大学院城市康隆君と東京理科大学理学部田村修一君の2名が受賞された。いずれも「分析技術の実用性」に力点をおいた研究である。「ぶんせき」2007, No. 4に受賞者の言葉が寄せられている。城市君は思わぬ受賞に驚きながらも、苦労を重ねた実験成果が最高の形で実ったことを素直に喜び、将来への大きな励みになると述べている。また田村君は研究過程で体験した様々な壁を技術的に、またメンタル的に指導者や仲間に支えられブレイクスルーできたことに深い感謝の気持ちを表している。二人の研究はいずれも企業の方を含む共同研究で、自身の研究意欲だけではなく、研究の遂行・開発にあたり、多くの協力者の協調と力添えが不可欠であることを窺い知ることが出来る。苦労して書き上げた初論文が「分析化学」に掲載され、研究者として自信を持たれたことでしょう。学術・科学技術の国際化が強調されているが、「分析化学」は日本語で研究内容を自身の力で主張できる貴重な学術誌であり、また新しい研究成果を研究仲間に広く知ってもらうのに適した論文誌と考えている。審査の過程では「正しい学術用語・格調の高い学術的表現法」など改めて学んだと思うが、研究計画、実験、考察、執筆などの研究プロセスの習得は若い研究者が育っていく重要なステップであり、投稿者は貴重な体験をされたと思う。また「文献検索の重要性」は目に見えない部分ではあるが、論文作成で最も重きを置く事柄であることも認識されたことであろう。

編集委員会では「若い研究者が育ち高い学術性が身につく」ように手助けすることを共通項目にして編集方針を議論し、丁寧な審査を心がけてきた。鋭い審査意見に悩んだ人もあると思うが、学術意識の向上には随分とプラスになる貴重なコメントであったと思う。掲載された論文が次の研究の起爆剤となり、よりレベルアップした研究に発展することを願っている。2008年も募集するので是非多くの人たちに投稿して頂きたい。

最後に投稿にあたりきめ細かく研究指導を頂いた先生方、また短期間に適切でかつ丁寧に審査をして頂いた審査委員・担当委員、そして集中した業務を滞りなく遂行して頂いた事務局のご協力に深く感謝申し上げます。